



えと文
奥田輝彦

歴史をもつ同志社の古色滄然な煉瓦建築の中で、おちついた、静かなこのチャペルの前では、なぜか心が引き締まる。

物心のついたころ、ぼくは一枚の写真をとこからか探し出した。尖頭アーチの下に学生服や袴姿が混ざった記念写真。その中の一人は、志を抱きつつ短い生涯であった父であることを、母から聞かされた。今から、五十余年も昔の、希望に燃えていたであろう姿であった。何も知らなかったぼくには、それ以来、チャペルと父とを、常に連想し、心に刻みつけていた。

煉瓦色が初夏の緑に包まれ、聳え立つ稜線と、重厚な石造りのせり。かきね越しには、学生の賑やかな語らい、声高な談論も、この聖域にはとどかない。まさに同志社の秘境というにふさわしい庭である。

時間のたつのも忘れ、無中でスケッチした。良い思い出になるだろう、私の心に、父は生きています。
(大学教務部職員)